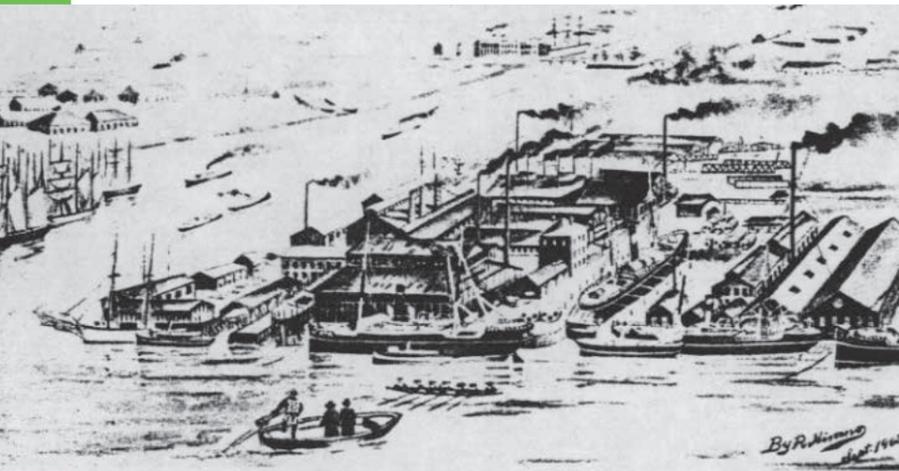


月島の発展

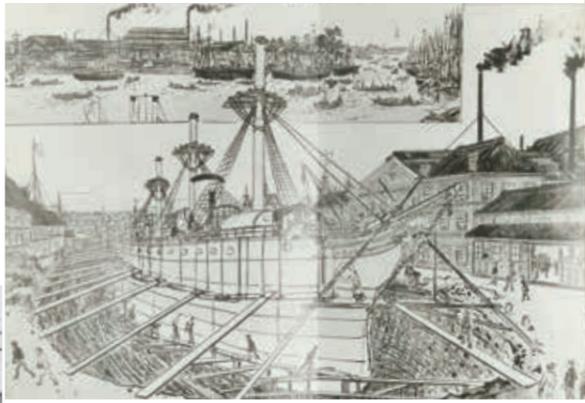
1876(明治9)年に民間に売り渡された石川島造船所は、日本の工業化の波に乗り、大工場化していた。月島の埋め立て地には、鉄工関連の工場の進出が続き、1906(明治39)年から行われた隅田川口改良工事によって月島地区はさらに広げられた。

<工場と働く人々の町>

大工場化した石川島造船所(→p.70)の周辺には、機械や鉄工関連の工場が集まり、月島は東京の工業の中心の1つになった。1903(明治36)年、江東区との間に相生橋がかけられると、水道・電気がしかれ、月島の暮らしは向上した。造船所関係の工場で作る人々の住居として、月島には長屋が多くつくられ、たくさんの人々が暮らすようになった。



月島3号地
月島2号地の先がさらに埋め立てられ、1913(大正2)年に月島3号地が完成した。



明治丸の修理
1901(明治34)年、当時の書物に紹介された石川島造船所。明治政府の船である、明治丸を修理をしているところがえがかれている。

大工場化した石川島造船所①
1904(明治37)年ころの工場全景。

陸と島を結ぶ

月島に暮らす人々の身近な交通機関は渡船だった。佃の渡し、月島の渡し、勝鬨の渡しがあり、人々の足として重宝された。



佃の渡し③
1645(正保2)年からの開始で、1876(明治9)年の渡し銭は、当時の切手の代金と同額で1人5厘。1926(大正15)年から東京市の運営となった。

勝鬨の渡し⑤

1905(明治38)年に東京市の渡船として開始。月島と築地を結ぶ無賃の手こぎ船。



月島の渡し④

1892(明治25)年開業。個人の渡し船だったのがちに市営となり、無料になった。1911(明治44)年には一晩中運航するようになった。



渡船から橋へ

月島の渡しと勝鬨の渡しは、1940(昭和15)年の勝鬨橋(→p.116)の完成によって廃止された。1964(昭和39)年の佃大橋の完成に合わせて、佃の渡しも廃止された。

●たくさんの人々が遊びにきた

渡船は月島に暮らす人々のほかに、たくさんの人々を運んだ。3つの渡船のなかで、もっとも利用されたのが月島の渡しで、船着場に近しい西仲通りには必然的に人が集まった。1917(大正6)年には月島海水浴場が開設され、東京市民に親しまれた。

西仲通りの夜店⑥

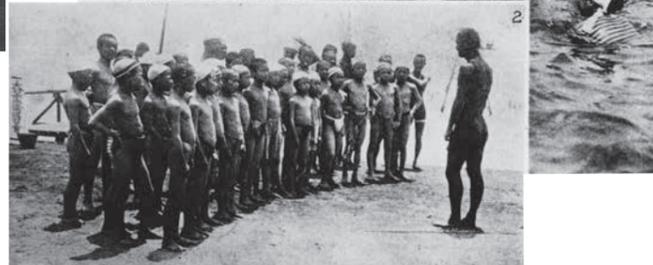
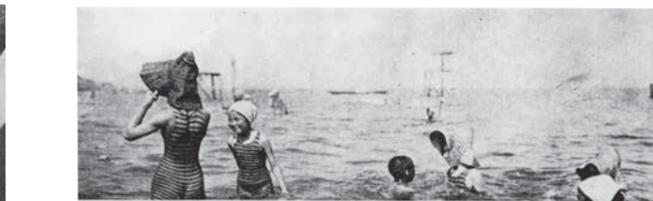
西仲通りには夜毎、夜店が出て人々でぎわった。多かったのは古着屋で、20店ほどあった。明治末には夜店もふくめて商売の地域として発展し、西仲通りが商店街となっていた。



現在の西仲通り



現在はもんじゃ屋が多いのよ!



月島海水浴場⑦
1917(大正6)年、開設されたばかりの月島海水浴場のようすを伝える写真。

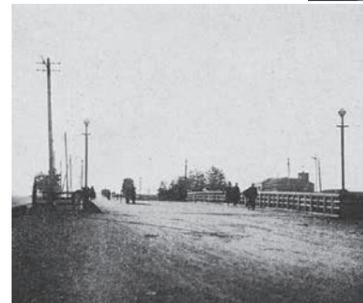
長屋

細長く建てた家を仕切って、いくつもの家族が住めるようにした。右の写真は、2007(平成19)年に、月島の長屋を写したものの。



相生橋②

橋がかかる前までの月島は、水道が通っていないだったので、船でくる水売りによる生活だった。そのため、人口がなかなか増えなかった。

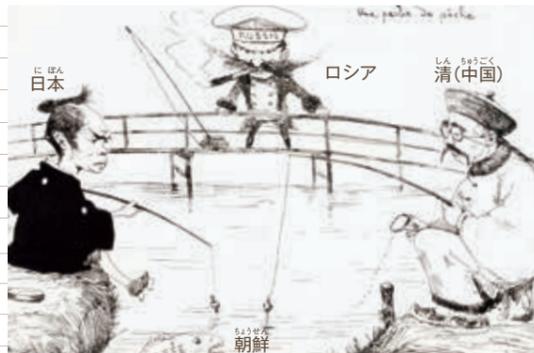


今も月島には、長屋が残っているのよ!



日清・日露戦争

1894(明治27)年、朝鮮の支配権をめぐる、日本と清(中国)のあいだで起こった戦争を日清戦争という。この戦争で日本は清に勝ち朝鮮に勢力をのぼそうとしたが、同じねらいをもつロシア(露)と対立し、これが日露戦争へと発展した。日清・日露戦争と、戦争のたびに日本の工業が軍需産業で活気づき、月島にも工場の進出が続いた。



日清戦争前の朝鮮をめぐる、日本、清、ロシアの関係を皮肉ってえがいた絵。

月島生まれのレバーフライ

1932(昭和7)年ころ、それまでは食べる習慣のなかったブタなどの内臓のうち、レバーを油で揚げて屋台で売り出した。これがレバーフライのはじまりだ。栄養はたっぷりなのに値段は手ごろなので、月島の人々の人気となった。



工場が増えて川の汚染が進んだ

造船や鉄鋼などの重工業が発展すると、その工場からの排水で海の水が汚れ、海の汚染が深刻な問題となった。そのほかにも、家庭から流れ出る排水も原因の1つだった。1920(大正9)年には海の汚染が原因で月島海水浴場が廃止になった。

